

教聖・廣瀨淡窓の研究」を読む

土屋 博

文語日誌（平成二十七年六月二十二日）

來年大分にて開催豫定の文語シンポジウムに備ふべく、神保町古書肆叢文閣にて中島市三郎著「教聖・廣瀨淡窓の研究」（昭和十年、第一出版刊）を購入す。

廣瀨淡窓は豊後國日田（徳川幕府直轄）出身の漢學者、詩人、教育家。天明二年（一七八二年）生まれ、安政三年（一八五六年）歿。

著者中島氏は、高等小學校校長を務むる傍ら、地元日田出身の偉人廣瀨淡窓を尊敬しその研究を數十年に亙り續けたるところ、本書にはその成果惜しげも無く披瀝せらる。

我が國の幕末期には約千五百の私塾の存在したる由なれど、塾生數延べ四六一七名（内豊後一二八五名）を數へたる最大規模の私塾こそ、廣瀨淡窓の創めたる日田の咸宜園なれ。ちなみに、咸宜とは、「ことごとくよろし」の意にて、詩經の「殷、命を受くる咸宜し、百祿是れ何ふ」に由來す。咸宜園には、甲斐、下野を除く全國六十四か國より學生集まりたるとぞ。（塾は淡窓の死後も明治三十年まで存續す。）

塾出身者には、「蕃社の獄」の蘭學者高野長英、長州の維新功臣大村益次郎、後に總理大臣となりし清浦奎吾、官途の名士松田直之、寫眞術の創始者上野彦馬をはじめ、中島子玉、大隈言道など名だたる人物輩出す。

「月旦評」は、淡窓の熟慮考案したる成績評價方法なり。毎月初めに門弟の成績番附を十九段階（級外、一級下より九級上まで）に分けて發表し、上位のものは下位のものを指導・監督する等自治の考へも含み、門弟長三州により、文部省の明治學制制定にも採り入れられたる由。

「淡窓全集に漏れたる文獻」として、「時間表」掲載せらる。『午前五時晨起・洒掃（水をかけたり、ちりを拂つたりしてきれいにする）、六時輪讀、七時洒掃・喫食、八時聽講・會讀、九時素讀・質問、十時聽講・會讀（數人が集まり同一の本を讀み、研究討論すること。）、十一時輪讀・復文（漢字假名まじり文を元の漢文に戻すこと。）・五字書會（扁額への揮毫など）、十二時喫飯・散步、午後一時輪講・質問、二時試業（テスト）、三時試業、四時試業、五時試業、六時喫飯・散步、七時夜學、八時夜學、九時夜學、十時就寢。』時間刻みの日課を眺むるに身の引き締まる心地とする。

咸宜園教育の要訣は詩によりて道に入ると言はる。

淡窓作の詩のうち特に人口に膾炙せしは、以下の詩なり。塾生の様子活寫せられあり。

桂林莊雜詠示諸生二首 桂林莊雜詠諸生に示す二首より

休道他郷多苦辛 道ふを休めよ 他郷苦辛多しと

同袍有友自相親 同袍友有り 自ら相親しむ

柴扉曉出霜如雪 柴扉曉に出づれば 霜雪の如し

君汲川流我拾薪 君は川流を汲め 我は薪を拾はん

また、次の和歌に、淡菴の教育方針よく見るべし。

『銳きも 鈍きもともに 捨てがたし 錐きりと槌つちとに 使ひ分けなば』

塾生の人格に對する畏敬の念なくば到底不可能なる眞の教育家的態度なり。

(平成二十七年七月二十七日受附)